

## ウルク・ワールド・システムの彼方

Beyond the Uruk World System

小泉龍人

Tatsundo KOIZUMI

本報告では、G. アルガゼ著『ウルク・ワールド・システム』（以下『ウルク』と略称）で提出された「ウルク・ワールド・システム」論の適用と限界について、各地域の考古学および粘土板史料研究の立場からさまざまな意見が披露された。冒頭の問題定義において紺谷の提示した6つの確認事項をおおまかに要約すると、ウルク文化の社会システムが周辺地域のどの範囲にまで及んだのか、該当地域での社会の複雑化とウルク・エクスパンションとの関わりはどうだったのかになろう。これらを踏まえながら、各論でそれぞれのフィールドや文書史料の研究成果に立脚した議論が展開された。総論的には、ワールド・システムとしてではなく、エクスパンションとしてウルク文化の範囲はメソポタミアと近隣地域（周辺ではない）に限定されるという点でおおかたの合意が得られているように見受けられる。本報告の総括として、各論で触れられた周辺地域から見たメソポタミア像も織り交ぜながら、ウルク・ワールド・システムの問題点を整理して、前4千年紀後半における都市化を描く視座構築に向けて試論したい。

### 問題点の整理

それぞれの論者は、アルガゼの「中心」と「周辺」の概念、非対称な交換、在地文化の後進性などについて、さまざまな矛盾点を指摘している。ここでは、南メソポタミアにとっての遠隔地から順に見ていく。まず、インダス文明の展開した地域について小磯は、インダス文明の周縁部には経済活動上の核となる地域が共存し、ワールド・システム的な「中心と周縁」の関係は成り立たないのでないかというP. コールの説を紹介し、インダス文明の中心そのものに不明な点が多いとも指摘する。そこにはメソポタミア同様に資料の不足があるだけでなく、文明の求心点をどこに設定するのかという根本的な問題がある。今回、イラン地域を本討論に含めていないが、インダスとメソポタミアをむすぶ物流ルートや、資源をめぐる両地域からのアクセスを考えるうえで、イラン地域も要地であることに異論はなかろう。

アルガゼの理論そのものよりも具体的な地域としてのエジプトに論点をおく高宮は、前4千年紀のウルク期に併行する時期にメソポタミア側からの搬入品の少なさを指摘する。唯一の例外としてラピスラズリは威信財としての活用は考えられるものの、経済的な点ではメソポタミアからの

影響は推測しがたいとする。他方で、模倣品といえども円筒印章のモチーフや文字などによる行政組織の運営へのインパクトも否定できないとする。そこには、エジプト独自のワールドが形成され、ナイル流域を中心として下ヌビアや南パレスチナなどの周辺にそれぞれ社会構造的な影響を与えたという。ここで、エジプトとメソポタミアの両方から影響を受けた南パレスティナは、鉱物や貴石などの資源の豊富なイラン方面とは違った意味合いで注目できる。南パレスティナはそうした資源供給地としてよりも、むしろエジプトと北シリア・メソポタミア方面との回廊として位置し、輸送手段のあり方として遊牧社会の存在が重要になるからである。この点において、インダスとメソポタミアの介在地としてのイラン地域もほぼ同列に論じができる。

都市・農村からなる世界の一方で遊牧世界「バーディア」に着眼する藤井は、ウルク・ワールド・システムは前者にのみ重きをおいた不完全なシステム論とする。遠隔交易の担い手として遊牧民を重要視し、かれらと都市・農村世界とのかかわりあいこそが都市化に大きな影響を与えたとする。沙漠の海を媒介とする交易には遊牧民が不可欠であり、彼らの運ぶ荷が上がる港、すなわちメソポタミアから見た周辺の拠点において両世界が接触する。両世界の出会いはこのような点ごとに起き、全体的に広がる面と面がぶつかりあったわけではなさそうだ。遊牧民による物資運搬はウルク文化に限らず物流や交換を復元するうえで重要な観点の一つである。さらに藤井は、南メソポタミアを軸にした「中心」と「周辺」という枠組みを越えて、社会的な人口の流動化も視野に入れた議論が都市化の考察には必要であるとしている。この点は筆者も同意見である。

南メソポタミアから見ると周辺に位置するアナトリアについて、三宅はウルク・ワールド・システムにおける遺跡の格付け評価を問題視し、一律に同レベルの精度ですべての遺跡が調査されていない実情を指摘する。一部のセトルメント間の序列化においては、根拠の不明確な認定が行われているという。これは、表採資料の分布から見かけの時期別占有面積を推測する手法にも通じる、いわゆるセトルメント・パターン研究のアキレス腱である。また三宅は、すでに多くの研究者が指摘してきたように、ウルク文化の拡大以前に在地社会がすでに複雑化し、スサの混和された明色系の土器群が広く分布しており、そこにある種の交易

ネットワークが存在していたとみる。

ウルク・エクスパンションの前にすでに社会変化が起きていたという状況は、北シリアや北メソポタミアでもほぼ同様である。ウルク・ワールド・システムへの方法論的な言及よりも地域の多様性に着目する小口は、北シリアや北メソポタミアにおける「プレ・コンタクト期」の編年と「ワイド・フラー・ポット／東方ジョバ・ボウル」の製作技術の問題に触れる。上述のように、ガウラ文化やそれに隣接する在地系文化は、ウルク・エクスパンションの前段階において互いにネットワークでつながっていたとする。やがて、南方起源のウルク文化は在地諸文化に多様に影響し、なかには対立ではなく共存の道が選択されたセトルメントも現れる。ハジュネビやゴディン・テペなどが好例である。

在地諸文化にさまざまなかたちで浸透していくウルク文化は、その中心地としての南メソポタミアでは資料的にかなり不足している。アルガゼによる「世界システム」論の誤用を指摘する前川は、ウルク期の南メソポタミアは政治的に未熟な状態であり、周辺を支配できるような政治権力がまだ出現していなかったと読む。これはP. シュタインケラーの批判とほぼ同様であるという。ウルク期の南メソポタミアは政治的な中心であったといわば無批判に前提とされてきたが、じつはそれほど成熟した段階にはなかったかもしれないという見方にもわれわれは留意する必要がある。また、ウルク後期末に出現した粘土板記録システムは大組織の管理を目的とした発明であり、遠距離交易の記録用に成立したのではないという前川の見解は、ウルク・エクスパンションの視点では見落としがちな文字出現の背景を鋭く指摘している。

以上より、本討論で得られたウルク・ワールド・システムのかかえる問題点は、おおまかに2つの点に集約できるようだ。「中心」と「周辺」の関係と社会の変化である。

### ウルク・ワールド・システムの適用と限界

#### 1) 「中心」と「周辺」の関係

今度は、欧米を中心とする研究者間では、アルガゼのウルク・ワールド・システムがどう評価されているのかを一部紹介してみる。すでに、ウルク・ワールド・システムでは消化しきれない資料を前にして、いくつかの面で軌道修正が試みられたり、「中心」と「周辺」の捉え方にさまざまな批判が加えられてきた<sup>11</sup> (Rothman (ed.) 1998, 2001など)。たしかに、R.McC. アダムズ (Adams)、H.J. ニッセン (Nissen)、H.T. ライト (Wright)、G.A. ジョンソン (Johnson) らのセトルメント・パターン研究を発展させたものの、社会における権力や影響力の多様な側面に対する論究が足りず、地域間交換や相互交流に対する関心が強すぎて、地域的な内的発展への関心が薄いという批判が目立

つ。これまで、漠然ととらえられてきたウルク期後半のウルク文化の北方（東南アナトリア、北シリア、北メソポタミアなど）への拡大は、ウルク中期後半に初現することが層位的に確かめられ、当時の北方の在地諸社会の一部はウルク・エクスパンションの前にすでに複雑化していたことが明らかになってきている。そして、南方の「中心」に対して北方の「周辺」社会は、けっして後進地域ではなく、独自の交易網を整備していたことも明らかになりつつある。先進の南メソポタミアのウルク文化と後進の北方の在地諸文化という構図、あるいは「中心」が「周辺」を支配するという不平等な関係だけではとらえきれなくなっている。

ウルク・ワールド・システム論への反響として、キーワードの読み替えにより、同じ歴史的事象が異なる視点から再検討されてきた (Rothman (ed.) 1998, 2001; Stein 1999など)。「中心」と「周辺」の関係は、南方ウルク文化と在地文化に置き換えられ、両地域間の非対称な経済的関係は多様性のひとつとして解釈されている。南方ウルク文化の単元的な支配構造に代わって、在地文化の地域的な機能や役割といったな多層的な構造に留意し、南方ウルク文化と在地文化との関係を接触、移住、競合、模倣、居留など多極的にとらえる傾向が強い。かつて「周辺」地域でウルク文化の植民地とされた拠点は、いまだにその用語にこだわる研究者を除けば、出張所的な出先機関あるいは居留地としてとらえられることが多い。アルガゼ自身も、近年の論考ではワールド・システムにはこだわっておらず、エクスパンションに回帰している。ただ、交易をメソポタミアにおける都市化あるいは国家形成の第一要因とする立場はかたくなに譲っていない (Algaze 2001a: 214, 2001b: 56)。

ここで、「中心」の政治的な影響圏と「周辺」の政治的な自律圏との関係が重要な検討課題となる。ハジュネビなどで認められるように、在地社会とウルク社会はたがいに自律的に機能し、両者は対等な立場で交換活動をし、前者から後者への非対称な財のフローはなかった場合も観察されている。両グループ間に戦争や競合、経済的支配の証拠がないことから、ハジュネビはウルク文化の居留地（ディアスpora）であったとされる。そこでは、「中心」による「周辺」の支配や不平等な交換関係が認められず、同盟関係を通じた在地交易網への平和的参入が見られることから、ウルク・ワールド・システムの代替モデルとしてディスタンス・パーティ・モデル (distance party model) と交易居留地モデル (trade-diaspora model) が相補的に提示されている (Stein 1999)。前者モデルは、集団間の距離と政治的関係から異なる地域ネットワーク間の力関係を位置づける。これにより、都市化したウルク社会と周辺地域の諸社会の政治的関係にはさまざまな段階があり、中心地から離

れるにつれてメソポタミアの社会的・経済的影響力は低下し、非対称な交換がより均齊のとれたものになると説明される。同時に G.J. スタインは、A. コーエン (Cohen) による西アフリカの民族誌研究にもとづく後者モデルによって、支配・被支配の関係でない自律的な集団間の関係、すなわち在地の受け入れ社会、居留社会、そのホームランドという3つの集団間の多様な力関係を説明しようとする。このようにより柔軟な概念枠でウルク期の北方諸社会の解釈が試みられているが、いずれのモデルも重層的なウルク社会の政治的あるいは経済的局面の一部を描写するにとどまる。

いずれにせよ、「世界システム」論を待たずとも、南メソポタミアを核とするウルク文化の北方諸地域への拡散現象は、エクスパンションという枠組みでおよそは理解できる。総じて、ワールド・システムよりもエクスパンションとして、前4千年紀のウルク期における諸文化の動態を中立的に説明しようとする視点が主流となっている。たとえば、M. ロスマン (Rothman) と B. ピースナール (Peasnall) は、ガウラ XII～VIII 層では、ハジネビ A～B1層、アルスランテペ VIII～VII 層、プラク TW19～16層と同様にウルク・エクスパンションの前段階からすでに社会が複雑化しており、その傾向は継続していたとする。そして、南方ウルク系集団のもたらす影響、あるいは増大する相互影響や交換による効果は、交換システムの各拠点における内的な発展によるとみる。つまり、内的な発展の活力はそれぞれの担い手自身に関わっており、单一あるいは若干の立案者により支配されるものではないという (Rothman and Peasnall 2000: 113-114)。そこでは、ウルク文化の拡大を解釈するにあたり、「インフォーマルな帝国」概念や「世界システム」論は拒絶されている。

「世界システム」論とウルク・ワールド・システムを比較した場合、地理的な枠組み設定における違いも無視できない。ウルク・ワールド・システムで想定される経済圏は、「世界=経済」の普及する地球的規模に比べてはるかに偏狭である。ウルク期の社会システムは、ウォーラースティン流に解釈しようとすれば、地理的範囲において「世界=経済」よりもむしろ「ミニシステム」の体系に近い。「世界=経済」の社会体系は、個々の主権国家を超越した資本主義と金融制度が前提となっており、文化的・政治的に多元的であるが、経済的には一元化された状態を示す。他方、ミニシステムでは、多様な地域ごとに個別の文化が展開し、経済面だけでなく、文化的・政治的にも一元的な構造とされる。高宮がエジプトの場合で示唆したように、かなり限定された地理的範囲内でのみシステム論が適用可能であると考えられることから、ウルク文化でも「世界=経済」よりもミニシステムの方が説明モデルとして現実味が出てくる。

る。

アルガゼの意図したウルク期の「中心」と「周辺」から構成されるウルク・ワールドは、経済的に一元化された構造だったかも知れないが、文化的にどこまで一元化され、どこから多元的なのかという重層構造はまだ解明されていない。小磯のインダスでの指摘にあるように、ウルク文化でも多極的な中心地を想定する余地はまだ残されている。現況では、南方のウルク文化と異なる側面をもつ在地諸文化が東南アナトリア、北シリア、北メソポタミア、西イラクに展開していたという大まかな関係の描写にとどまる。後者の多様な諸文化がウルク系文化の単なる地域差ではなく、どこまで実質的に異なる文化としてそれぞれ自律していたのかはこれから解明されるべきテーマであり、解釈モデルの前提になりうる検証済みの成果ではない。

## 2) 社会の変化

つぎに、ウルク・ワールド・システムにおける社会変化の考え方について触れる。アルガゼにとって、ウルク期における社会発展の過程は、アッカド期の帝国へつながるという見通しがあった。『ウルク』の冒頭でアルガゼは、アッカド時代と同様に、すでに前4千年紀のウルク期において、複雑な超地域的な相互影響システムが確立されていたとする (Algaze 1993: 5)。経済的かつ政治的に支配された「フォーマルな帝国」に対して、経済的に一元化された「インフォーマルな帝国」をウルク期に想定して議論の出発点としたのである。しかし、結論において、唯一の政治組織によって統括される場合に限定される「インフォーマルな帝国」概念は、ウルク期の「中心」構造には不適格としている (Algaze 1993: 115)。

残念ながら、「インフォーマルな帝国」概念を持ちだしたばかりに、ウルク・ワールド・システムを難解にしてしまっているようだ。たしかに、世界システム論の「世界=経済」に類似した構造がウルク期にあったという見通しのもと、政治的境界を超越した経済的な関係を重視した着想は卓見であった (Algaze 1993: 8)。そして、政治的境界と経済的影響圏がほぼ重なるとするフォーマルな「世界帝国」概念に対して、「世界=経済」的な経済関係がすでに古代にも見られるとの立場から「インフォーマルな帝国」概念を導入した。しかし、インフォーマルな経済的支配はあくまで単一の中核国家を前提とするために、この概念はウルク期の「中心」に展開する複数の政治組織の存在と矛盾してしまったのである。つまり、「インフォーマルな帝国」概念は、ウルク期において競合する多元的な政治組織を包摂できない枠組みであった。ウルク期の社会構造で「インフォーマルな帝国」概念によって合理的に説明できたのは、経済的関係によって多様な周辺地域が一元化されるという点に

あるが、これはI. ウォーラースteinの「世界=経済」モデルで十分に予見されていた枠組みである。論理展開におけるこの余計ともいえる手続きのために、ウルク・ワールド・システム論が冗長になっている。

つまるところ、「インフォーマルな帝国」概念や、さらには「世界システム」論なしでも、地域差に留意した考古学的な資料の時期的な組列化からウルク・エクスパンションはかなり説明できる。実際に、『ウルク』の序章と終章を除いた多くの部分は、とくに両概念の支援なしに、考古資料の分析によってウルク文化の拡大プロセスが整合的に描写・説明されている。その複雑な内容をより単元的なパターンで図式化しようとすると矛盾が生じるのである。たしかに、16世紀のヨーロッパを中心とした「世界システム」論から脱却するために、近代以前の非西欧における世界システム的な経済構造を見出すという視座は称賛に値する。しかし、「世界システム」論から出発し、19世紀のイギリスの「自由貿易による帝国主義」に代表される「インフォーマルな帝国」概念を持ちだし、前二者の概念を織りあわせて前4千年紀のウルク期にまで社会システム概念を敷延するにはかなり無理があろう。歴史的な違いはむろんのこと、システムを維持する根幹的な物流の仕組みや手段がまったく異なるからだ。システム上で形態的に似ているところもあるが、実質的には異なる面が多すぎる。アルガゼ自身その論理的手続きにおける問題点を認めながらも、「世界システム」論はウルク社会に適用可能と結論している(Algaze 1993: 125-127)。この論理的手続きにはやや強引な印象をおぼえる。

『ウルク』以降のアルガゼの論考によると、南メソポタミアのウルク期にはつぎのような発展が観察されるという(Algaze 2001b: 34-37): 1. 宗教、政治、軍事的役割にもとづいた権力をもつ制度化された統治者、2. 戰略的な物資の収集と再分配における国家的役割、3. 産業規模の工芸や職業の専業化、4. 従属労働を支配する国家の度量法、5. 経済的・社会政治的变化を確認する必要のある新しい形態のシンボリックな表現(文字、記念碑的芸術)。アルガゼは、これらを政治組織が国家になるための条件としている<sup>2)</sup>。資源に乏しい南メソポタミアで急成長する都市や、格差の激しくなるウルク社会にとって周辺地域の資源は必要不可欠であり、その資源獲得の手段として交易が重要となり、これがウルク・エクスパンションの第一要因であったとする。

この交易網は、メソポタミアとその周辺地域においてはじめて浸透した植民的企業体(*colonial enterprise*)であったという(Algaze 2001b: 70)。この企業体は軍事力ではなく経済的な支配によって支えられ、交通の要所に植民地をつくり資源の占有を目的とする。樹枝状に植民地を支配す

るこのウルク期の植民的企業体は、領地を政治的に支配したり、租税の徴収によって霸權を確立した帝国とは異なるという。『ウルク』では「インフォーマルな帝国」という実体のさだかでない概念であったが、この新しい論考では企業体が植民化により資源を支配する構造が示されている。『ウルク』での概念的な不足を認めながらも、社会変化の動因の最上位に交易を設定し、「中心」における複数の政治組織の競合関係も重視する方法論に大きな変化は見られない。こうしたアルガゼの新しい論考では、「世界システム」論や「インフォーマルな帝国」概念が「企業体」という真新しいことばで表現しなおされているにすぎない。

他方、ウルク遺跡の考古学調査を先導するニッセンは、社会変化はつねに一連の需要に対する反応として起き、ウルク文化のなかでもとくに行政的な機構の出現は、在地集団が自分たちにとって有用な新しい制度を採用したこと示すとしている(Nissen 2001)。ウルク文化の発展にとって、外部からの不当な圧力は主要な動因とみなされていない。在地社会の外部とのかかわり合いは、在地社会そのものの発展の質によって決まるという<sup>3)</sup>。したがって、ウルク・エクスパンションは在地諸文化をまたぐウルク文化の広がりであり、諸文化の関係を説明するのに政治的ネットワークが重要な手がかりとされ、個々の社会変化はそれぞれの内的発展が主幹となり、外部からの影響は副次的なものと位置づけられている。もはやそこでは、ウルク・ワールド・システム論の影はきわめて薄くなっている。

## 今後の展望

では、前4千年紀の社会復元を目指すときに、ウルク・ワールド・システムに代わってどのような視座を求めたらいいのだろうか。これまで見てきたいくつかの代替モデルで十分に説明できるのであろうか。

まず、地理的な枠組みとして、個別の地域と、メソポタミアおよび近隣地域全体という重層的な視点が必要となる。それぞれの文化が地域別に展開し、これらはネットワークにより全体的に関係づけられる。ただ、ウルク期を通して、全体の求心点が南メソポタミアに限定され続けたとはいきれない。それ以外の地域で発掘されつつある拠点の位置づけが今後の課題になる。これまで無類の都市とされてきたウルクも含めた全体における相関という意味では、先のディスタンス・パリティ・モデルも活用できよう。前4千年紀のメソポタミアとその近隣地域にはいくつかの文化が展開し、それらをむすぶネットワークは経済的なものであったのはたしかなようである。もちろん、これは諸文化の関係性を示唆するだけで、その全体的な実態を言い当てるわけではない。しかし、ウルク期の社会を復元するうえで、ネットワークという各遺跡をむすびつける紐帶

構造が重要な手がかりであることには間違いなさそうだ。

ここで、ウォーラースteinの「世界システム」論の形成に大きな影響を与えたF. ブローデルの歴史観がヒントになるかもしれない。ブローデルは、歴史を「地理的な時間」「社会的な時間」「個人の時間」に成層化できるとした（ブローデル 1999：21-23）。そして、ウォーラースteinは社会的な時間あるいは変動局面を社会科学的にとらえ、経済に重心を置いた近代世界システム論を展開し、それにアルガゼが追従する図式になっている。だが、歴史の復元を目指すには、ウォーラースteinにはじまる一連の抽象化指向の議論とは逆向きの思考が要求される。ふたたび歴史の多層化にまで立ち返り、とくに、地理的環境に根づいた地域的文化の解釈という考古学の土俵に議論を戻す必要がある。この方向性は、上述のウルク・ワールド・システム論に対するいくつかの反応でも十分に示されており、その流れに同調しながら筆者の私見を以下に紹介しておく（小泉 2000, 2001a, 2001b）。

ウルク文化の地域関係を復元するために、先行するウバイト期の各水系を軸とする地域的文化圏（地域圈）ごとに、さまざまな事象の変遷を考古学的に検証する必要性を提言したい。ウバイト期の地域的文化は、墓制や集落構造において画一的で平等な構造をもち、まだ経済的な格差は現れていなかった。集落内の空間利用は一般住居を基本とし、生産様式も世帯を単位とし、神殿や公共施設などに求心力があった。水系を単位とするウバイト期の地域圏は、目の文様やヘビの文様などをシンボルとした祭祀ネットワークによりたがいに統合されていた。ウバイト期の地域的文化は、祭祀的な紐帶関係によってむすびついていたのである。やがて、祭祀ネットワークを基盤とした地域圏のつながりは、墓制や集落構成における経済的格差の出現により、世俗的なものへと変質していく。ウバイト期の祭祀ネットワークが、ウバイト終末期に経済的流通の需要に後押しされて物流網へと変化はじめ、ウルク期には経済的な交易ネットワークへとシフトする。

同時に、社会変化の推定においてもネットワークが軸になりそうだ。これまで、ウルク期の南メソポタミアと近隣地域をつなぐ物流網の研究は生産地と消費地の関係論が先行し、運搬手段をはじめとした流通自体の研究が遅ってきた。生産地と消費地は経済的に一元化された関係でくられ、その具体的な流通構造は憶測の域にとどまってきた。そこで、筆者は独自の視点から、ウバイト期からウルク期にかけての輸送手段の変遷から、社会的な紐帶構造の変化を考えてみた。ウルク期の交易ネットワークは、ウバイト期の運搬手段の基幹であった河川の水上ルートにくわえて陸上ルートも包摂している点に大きな特徴がある。ウバイト期における舟などを用いた水上輸送の普及、ウルク中期

ころのロバの家畜化や車輪技術の応用開発などを勘案すると、前4千年紀の中ごろまでに水系を基軸としながら陸上ルートも併用した交易活動が活発化したといえる。藤井の指摘にもあるように、陸上ルートにおいて、生産地あるいは中継地と消費地との間のパイプ役として遊牧民が活躍していた可能性が高い。筆者は、ウルク期になると、ウバイト期の祭祀ネットワークを基礎とした経済主導の物流システムが複数の水系を横断はじめ、陸路も取り込んだ交易ネットワークが形成されたと考えている。

さらに、ウルク期の交易ネットワークは、陸上ルートを媒体としてそれぞれの地域圏をつないでおり、従来にはなかった緊張関係が増長されていった。こうした社会的緊張の高まりにより、単なる地域的文化の境界としての地域圏は、社会構造の変質とともに政治的に支配される領域へと発展していった。交易ネットワークという経済的な紐帶構造により、政治的な領域形成が指向されていったと読み取れる。その延長には、前川の指摘するように、ウルク後期になるとそれまでの拡大とは逆向きの収斂が起きて、文字成立への圧力が高まり、まもなく都市が誕生する。

地理的範囲と社会変化軸を包括する概念枠としては、上述してきたネットワークの議論がこれからもその一翼を担うと思われる。もちろん、都市形成期の社会構造の解明において、まずなによりもフィールド調査にもとづく通時的变化の把握、すなわち土器を中心とする編年の構築や、隣接地域とのクロス・チェック、さまざまな事象の座標設定といった作業が基礎となる。小口や三宅の指摘するような、特定型式の土器分布の比較検討が手堅い作業となろう。さらに、概念枠の形成において、地域的な編年にもとづく事象の時間差と共時的システムの系列差をすり合わせる作業も必要となる。その先には、比較文明論的な参照軸の設定もからんでくる。

### まとめにかえて

さいごに、参照軸の置き場についての問題点をいくつか指摘して本報告の締めくくりとしたい。アルガゼが社会変化の第一要因を非対称な交易にもとめた背景として、近代市場経済システムが前4千年紀の物質文化の動態に投影されてしまう安易な姿勢が認められる。こうした古代解釈にいとも簡単に投影されてしまう現代文明論は、グローバリズムという支配と非対称からなる権力関係の構図を見て取れる。簡単に言うと、イデオロギー的な対立軸が崩壊したことにより、途上国から搾取した富や資本・人材が一部の国に集中し、貧富の差が拡大する。こうした格差の埋め込まれた世界認識の構図が、そのまま古代版グローバリズムとして安直に転化してしまう傾向だけはぜひとも避けたい。事実、考古学的に検証してきたウルク文化には、経済

的資本による世界覇権や、貧富の差を巧妙に隠し込む覆面の帝国主義を読み取れるだけの材料に欠ける。

われわれ自身の足場そのものについても考え直すべき点がある。好き嫌いは別にして、だれしもどこでもハンバーガーやフライド・チキンを容易に手にすることができる、こうした利潤追求を目的にする食文化がどれだけ一方的に身近な生活に浸透しているのかがわかる。そこには、「パクス・アメリカーナ」とでもいうべき大国支配による疑似平和観の押し寄せが見え隠れする。われわれの足場はこうした経済的覇権の波にどっぷりとつかっているのである。ただ、この現状がすべて悪いと非難するのではなく、正しく認識する姿勢が大切であろう。ちょっと見た目に平和風の巧妙な経済の海におぼれることなく、今いる自分の足場を確かめようとする意識は、ひるがえって古代を見抜く眼力ともなるにちがいない。

同時に、国際関係の枠組み理解の進展速度は、古代社会の解明の進度をはるかにまさる。現代の国際関係論の深化に、考古学による社会の復原作業が追いついていない。よりいっそう複雑になる国家・民族間の関係をとらえる枠組みは、考古資料の地道な積み重ねによって少しづつ浮かびあがりつつある古代社会像を、概念先行の虚像にしてしまう恐れがある。十分に間合いをとった視座から、地道なフィールドの積み重ねと、概念枠についての問題意識をつなに継続させる姿勢が問われる。両者は、アプローチにおいて一見して異なる方向性にあるが、究極的には焦点が重なり合ってくる。

ウルク・ワールド・システムをめぐる今回の報告により、前4千年紀におけるメソポタミアとその近隣地域の都市化プロセスに関する議論の流れがかなり鮮明になったようだ。ウルク・ワールド・システムでは実態の不透明な「中心」が「周辺」を支配した構図が仮想され、その反響として、周辺とされる地域でさまざまな文化動態や社会の複雑化が指摘されてきた。現状のままでは、考古資料の南北格差を埋める有効な手立てに欠け、これ以上議論を深めても、都市形成期の研究において手詰まりの状態を脱するのに効果的な進展は期待できそうにない。そして、こうした一連の議論の推移として、再開しつつある南メソポタミア方面での発掘調査が契機となり、メソポタミアの都市化あるいは国家形成の議論が活性化していくと予想される。これまでの議論に通底してきた理論と資料の乖離を少しでも解消し、より多くのフィールドから得られたデータをいっそう信頼できる糸でつなげていく作業が考古学的に問題解決できる唯一の筋道と筆者は考える。

## 註

1) ウルク・ワールド・システムは、南メソポタミアや北シリアといっ

た個々の地域を分析単位としている。これは、ウォーラースティンが「世界システム」論において経済的な関係システムを分析単位としたのと明らかに異なる。ウルク・ワールド・システムで展開されてきた手法としては、地理的に区分された地域が分析の基本単位であった。

- 2) アルガゼによるとウルク期の「中心」には初期都市国家が想定されているが、その政治組織は国家と認定するには未熟な段階で、考古学的には明らかに都市といえる。メソポタミアの都市の基準には諸説あり、多岐にわたる要因が知られている。一般的な議論においても、都市と国家が混同される場合があまりにも多いのでそれらを整理する必要があるが、本報告の主旨から離れるので別稿を参照されたい（小泉 2001b）。
- 3) 類似概念の適用例として、R. E. ブラントン (Blanton) らは中央アメリカの社会変化において、社会形成のなかには在地社会システムの境界を越えた相互影響の結果によるものもあるが、外部と在地の相互影響がかならずしも社会的、文化的変化のおもな要因になるとは限らないとする。そして、地域的システムは単なる一在地社会システムの拡大した、いわゆる一元支配的な構造ではなく、地域規模における多様なネットワークはそれぞれ独自の動態を示すとする。さらに彼らは、中央アメリカの社会変化の説明モデルとして、政治的経済にもとづく行動理論の提示を試みている。彼らによると、その説明モデルはデュアル・プロセッシャル理論 (dual-processual theory) であり、これにより一方は排他的で個人指向的で、他方はより集団指向的な2つの政治行動パターンの相互影響と対立を明らかしてくれるという (Blanton et al. 1996)。メソポタミアの社会変化にこうした行動理論を導入しようとする動きが一部で見られるが (Rothman and Peasnell 2000など)、その評価はまだ定まっていないので、ここではあくまで参考例として紹介するに留める。なお、筆者の考えるウラク期の祭祀ネットワーク、ウルク期の交易ネットワークは、彼らのネットワーク論とは同義ではない点をお断りしておく。

## 引用・参照文献

- Algaze, G. 1993 *The Uruk World System : The Dynamics of Expansion of Early Mesopotamian Civilization.* Chicago and London, University of Chicago Press.
- Algaze, G. 2001a Initial Social Complexity in Southwestern Asia. *Current Anthropology* 42/2: 199–233.
- Algaze, G. 2001b The Prehistory of Imperialism : The Case of Uruk Period Mesopotamia. In Rothman (ed.) 2001, 27–83.
- Blanton, R.E., G.M. Feinman, S.A. Kowaleski and P.N. Peregrine 1996 A Dual-Processual Theory for the Evolution of Mesoamerican Civilization. *Current Anthropology* 37/1: 1–14.
- Nissen, H.J. 2001 Cultural and Political Networks in the Ancient Near East during the Fourth and Third Millennia B.C. In Rothman (ed.) 2001, 149–179.
- Rothman, M.S. (ed.) 1998 Mesopotamia in the Era of State Formation : SAR advanced seminar summary. [Http://science.widener.edu/ssci/mesopotamia](http://science.widener.edu/ssci/mesopotamia).
- Rothman, M.S. 2001 The Local and the Regional : An Introduction. In Rothman (ed.) 2001, 3–26.
- Rothman, M.S. (ed.) 2001 *Uruk Mesopotamia & Its Neighbors : Cross-Cultural Interactions in the Era of State Formation.* Santa Fe, New Mexico, School of American Research Press ; Oxford, James Currey Ltd.
- Rothman, M.S. and B. Peasnell 2000 Societal Evolution of Small, Pre

- state Centers and Polities: The Example of Tepe Gawra in Northern Mesopotamia. *Paléorient* 25/1: 101-114.
- Stein, G. 1999 *Rethinking World-Systems: Diasporas, Colonies, and Interaction in Uruk Mesopotamia*. Tucson, University of Arizona Press.
- ウォーラースtein、I. (川北 稔訳) 1981 『近代世界システム I・II—農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』岩波書店。
- 小泉龍人 2000 「前4千年紀の西アジアにおけるワイン交易—ゴディン・テペからの一考察—」『東洋文化研究所紀要』139冊 207-238頁。
- 小泉龍人 2001a 「古代西アジアにおける墓制と社会組織—ウバイト期の祭祀統合社会—」高橋龍三郎編『現代の考古学6 村落と社会の考古学』104-136頁 朝倉書店。
- 小泉龍人 2001b 「都市誕生の考古学」世界の考古学17 同成社。
- ブローデル、F. (浜名優美訳) 1999 『藤原セレクション 地中海』1 藤原書店。

早稲田大学文学部  
Waseda University